

研究課題	世界を変える力となるコンピテンシーを育む
副題	～地域や世界とつながる主体的・対話的で深い学びの具現化～
キーワード	コンピテンシー・深い学び・ICT活用
学校/団体名	新潟大学附属新潟中学校
所在地	〒951-8535 新潟県新潟市附属新潟中学校
ホームページ	<a href="http://jhs.niigata.ed.niigata-u.ac.jp/">http://jhs.niigata.ed.niigata-u.ac.jp/</a>

## 1. 研究の背景

### (1) 社会的な背景

社会や経済の混乱、低迷、生産人口の減少の一方で増加する外国人労働者、情報化やグローバル化の進展や技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく変化を遂げる時代。このような一つの答えがない未曾有の事象・現象の表出、目標や理念を失う現象、傍観者的傾向など、これからの将来を生きる生徒は、そこで生じる新たな問題を解決していくことが求められる。その中で、様々な変化に向き合い、ジレンマと向き合い乗り越えられること、他者と協働して課題を解決することや、新たな価値の創造に責任をもってやり遂げる人材の育成が急務となっている。

だからこそ、生徒は、与えられた課題を追究し、今まで当たり前と考えられてきた知識を学ぶだけではなく、自ら課題を見付け、これまでの自分の既存の知識と新しい知識とを関連付け、自分にあった方法で課題を乗り越え、自分がかかわる世界（人、もの、こと）をよりよい方向へ変える力を身に付けることが必要である。

### (2) 求められる資質・能力ベースの教育課程編成

新学習指導要領で示されている教科等で育成する3つの資質・能力「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」を発揮して、授業や活動等で学んだことを、社会で起きている事象・現象等の理由や背景につなげることや、OECD Learning Framework 2030においてキー・コンピテンシーの育成が求められている。各教科等で育成する資質・能力にとどまらず、教科等横断的な視点に立った資質・能力をどのようにして育成するのが見えてきたものの、教科と特別活動、教科と教科、教科と総合的な学習の時間など教育課程全体で教科等横断的に視点に立った資質・能力を育成することが重要である。このようにすることで、一層、コンピテンシーを活用したり、実感したりすることとなる。

だからこそ、従来の教育課程から、新学習指導要領で示されている教科等で育成する資質・能力ベースの教育課程編成が求められる。

## 2. 研究の目的

当校の、教育目標は、「生き方を求めて学ぶ生徒」である。この「生き方を求めて学ぶ生徒」の具体的な姿は、「自らの目標を設定し、目標達成に向けて、学んだことを既存の知識や新しい知識を関連付けて、自分の生き方を求め続けることができる生徒」である。社会とのかかわりの中で、自分が向き合うべき課題を見つけ、課題の解決に向けて、主体的に取り組んだり、他者と

協働したりしながら、学び続けることができる生徒の育成を目指している。

先が見えず、正解のないこれからの時代を生きる生徒にとって、そこで生じる新たな問題について、背景や立場が異なる他者を尊重し、協働しながら最適解を見いだしていくことが求められている。だからこそ、生徒には、背景や立場が異なる他者と協働する際、異なる考えが表出される中で、目的と方法の整合を図り、妥協点を見いだしながら対立やジレンマを乗り越え、自分がかかわる世界をよりよい方向に変える力が必要となる。

以上のことから、授業だけではなく教育課程全体で世界を変える力を育まなければならない。そして、どのように計画・実施・評価・改善していけばよいのかを明らかにしていかなければならない。そこで、今年度研究では、「世界を変える力となるコンピテンシーを育む」を研究課題とした。その上で今年度は研究を進めるにあたって、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で教育活動に制限がかかったこともあり、研究内容として教育課程編成は据え置き、世界を変える力を高める教科の授業モデルの考え方・在り方を明らかにすることについてのみとし、研究の副題を「～地域や世界とつながる主体的・対話的で深い学びの具現化～」と設定した。

そして、Panasonic 財団の研究指定のもと ICT を活用することで以下の 2 点を目指す。

- ① ICT の活用による地域や世界とつながる主体的・対話的で深い学びの実現
- ② オンライン授業・GIGA スクール構想に向けた環境整備

### 3 研究の経過

本校の研究部を本研究の研究組織の中心に位置付け、表 1、表 2 の計画に沿って全職員で研究に取り組んだ。その一部を抜粋して掲載する。

< 表 1 研究の過程 >

時 期	取組の内容	評価のための記録
4月2日(木)	職員研修(研究概要の説明,各教科等授業案の提案)	提案資料
4月3日(金)	職員研修(各教科等授業案の提案,特別活動研修,カリキュラム・マネジメント研修)	提案資料
5月7日(木)	職員研修(ICT実践研修①)	観察記録・写真・資料
7月9日(木)	職員研修(ICT実践研修②)	観察記録・写真・資料
7月31日(金)	生徒アンケート調査	アンケート調査
8月	オンライン評価セミナー	資料
9月10日(木)	視察受け入れ(ICT実践の視察,新潟県立教育センター4名)	資料
10月14日(水)～11月5日(木)	研究授業(公開授業・協議会)	観察記録・写真・動画・
11月27日(金),11月30日	視察受け入れ(ICT実践の視察,	資料

(月)	新潟市立総合教育センター 8名)	
12月4日(金)	職員研修(授業実践の振り返りに ついて)	資料
12月24日(木)	生徒アンケート調査	アンケート調査
1月6日(水)	オンライン評価セミナー	資料
2月18日(木)	職員研修(今年度の振り返りと次 年度の研究の方向性について)	資料

#### 4. 代表的な実践

##### (1) ICTの活用による地域や世界とつながる主体的・対話的で深い学びの実現

- 代表的な実践として英語科における実践を紹介する。

##### ① 単元名

Lesson 5 Places to Go, Things to Do (NEW CROWN English Series 3) (3年)

##### ② 目標

- 新潟大学の留学生に附属新潟中学校の学校行事や学校生活を紹介する活動を通して、以下のことができるようになる。
  - ・ 関係代名詞(主格・目的格)を用いて、附属新潟中学校の学校行事や学校生活を説明する技能を身に付けること
  - ・ 留学生の興味や、背景となる文化の違いに配慮しながら、附属新潟中学校の学校行事や学校生活を説明すること【話すこと(発表)】
  - ・ 仲間と表現し合い、協働的に表現力を高め、附属新潟中学校の学校行事や学校生活を説明しようとする態度を身に付けること

##### ③ 実践の概要

本単元では第3学年英語科の授業で生徒が一人一台のパソコンを活用し、8名の留学生に対して附属新潟中学校の学校紹介をZoomミーティングを活用して行った。単元の初めに、留学生とお互いに自己紹介をした後、「附属新潟中学校の学校行事や学校生活を紹介してほしい」という依頼を受ける状況設定をする。そうすると生徒は、依頼に応えたいと思うが、表現力の乏しさから伝えたい内容をうまく伝えられず、よりよい紹介をしたいという目的意識を高める。そして、留学生に附属新潟中学校の学校行事や学校生活の紹介をよりよくするためには、どのようにすればよいだらうかという課題を見いだす。そこで本単元の授業では、コミュニケーションの目的や場面、状況を基に、それらに応じた必要な表現方法を活用する活動を意図的に設定したり、習熟を図る活動を設定したりする。例えば、附属新潟中学校の行事や学校生活、日本の文化などを留学生に紹介するという状況で、ロールプレイを行ったり、どんな表現が有効だったか仲間の表現を共有し、協働して練り上げたりすることで、表現の幅を広げていったり、考えを深めたりしていく。

ゴールとなる活動では、生徒は附属新潟中学校の学校行事や学校生活を紹介するが、

さらにその後で留学生から、生徒が紹介した内容の中で、背景にある文化が異なることにより生じる疑問をぶつけてもらう。例えば、「体育祭ではなぜ団体種目ばかりで個人種目はしないのか。」（中国）、「なぜ自分たちで清掃するのか。」（ドイツ）、「入学式とは何か。」（台湾）、「なぜ卒業式がこんなに静かなのか。」（アメリカ）などである。これにより、生徒は自分の考えが伝わらない理由が、自分たちの英語の表現方法だけではなく、相手の背景にある文化や価値観などにあることに気付く。生徒は相手の背景にある文化や価値観を調べ直し、相手に必要な情報を入れたり表現方法を工夫したりしながら、新たな紹介を完成させる。この活動を通して、相手への配慮を伴った、より深いコミュニケーションができたことの喜びを、生徒は実感する。

#### ④ 単元の実際

##### ○ 留学生との1回目の交流



【図1 授業の様子】

留学生に附属新潟中学校の学校行事や学校生活を紹介する活動で、生徒は自分の考えが伝わらない理由が、自分たちの英語の表現方法だけではなく、相手の背景にある文化や価値観などにあることに気付いた。

10/19	5時間目	交流②	A	伝えている所が多かたよりに感じる。 より理解してもらえよにしたい。
A	目的や目的は想像もした事は僕が同レベルのブログにも変更して 決まってる興味深い文化的な違い。あと本質的な部分も表示せられた。 ↑ 言語を伝えているよ			

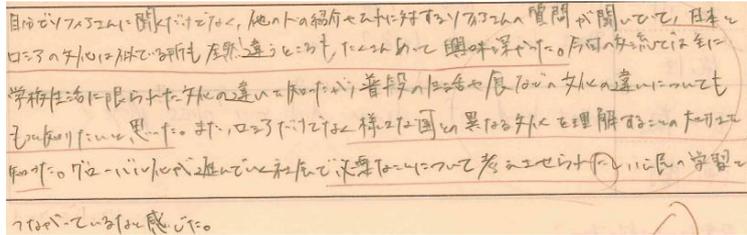
【図2 生徒の授業後の振り返り】

生徒は相手の背景にある文化や価値観を調べ直す必要性を感じ、次の交流に向けて、生徒は相手の背景にある文化や価値観を調べ直し、相手に必要な情報を入れたり表現方法を工夫したりしながら、新たな紹介文を完成させた。

##### ○ 留学生との2回目の交流



【図3 授業の様子】



【図4 生徒の授業後の振り返り】

生徒は自分たちが当たり前と思っている日本の行事が、文化的背景の違う相手にとっでは当たり前ではないことに生徒は気付いた。はじめは日本に住む自分たちの常識の中で学校行事を紹介していたが、自分の考えが思うように伝わらないことに気付き、その理由が自分たちの英語の表現方法だけではなく、相手の背景にある文化や価値観などにあることに気付いた。ICTを活用したからこそ、容易に世界の人々となることができ、これにより、生徒は異なる考えを理解したり、言語や文化の壁を乗り越えたりすることの価値を実感した。この姿こそ、外国語科における教科の本質を踏まえた深い学びを実現した生徒の姿である。

(2) オンライン授業・GIGAスクールに向けた環境整備

今年度は休校期間中を活用し、オンライン授業の大綱を作成した。そこでは、職員分担・オンライン授業の日程・授業のあり方・評価の考え方などが共有された。また、オンライン授業用の授業構想検討を行った。その後、オンライン授業を行うことはなかったが、構想した授業を校内のICTを活用して実践した。さらに、この大綱を活用して、夏休み中にオンライン学習サポートを全教科で行い、学校と家庭が繋がることができた。

5. 研究の成果

今年度の取組を通して、次の2つを成果とする。

① 世界を変える力の自覚化

教育活動アンケートの結果より以下のことが明らかになった。

質問項目	肯定的評価の割合
教科等の学習で、他者との考えが異なることの大切さを理解し、他者の考えを取り入れながら、課題の解決方法を考えることができた。	97.0%
授業での話し合いやグループ活動の中で、「自分が何をすれば みんなの役に立つか」を考えて、その行動をすることができた。	94.9%
授業での学びや活動の中で、多くのことを学んだり、考えたりすることで、人々の暮らしを変えたり、社会をより良くする人になりたいと思った。	91.8%
授業での学びや活動の中で、今までのやり方を見直したり、新しい取り組みを提案したりすることで、学校やクラス、授業をより良く変えていきたいと思った。	91.4%

今年度は授業研究を中心に進めた。その成果として、自ら課題を見つけ、これまでの自分の既存の知識と新しい知識とを関連付け、自分にあった方法で課題を乗り越え、自分がかかわる世界（人、もの、こと）をよりよい方向へ変える力を身に付け始めてきていることが明らか

かになった。

## ② 教職員の ICT 活用率の向上

2 学期の教職員の教育評価アンケートの結果より以下のことが明らかになった。

質問項目	回答
授業においてどのくらいの頻度で ICT を活用しましたか(教師自身の活用)	ほぼ毎時間活用した… 85.0%
授業においてどのくらいの頻度で ICT を活用しましたか(生徒自身の活用)	半分以上の時間で活用した…53%

オンラインに向けた環境整備から始め、オンライン授業構想検討をしたことで、教職員が ICT を活用するイメージをもつことができ、その後の授業で活用する場面が大幅に増えた。

## 6. 今後の課題・展望

今年度の研究では、アンケートの結果や授業記録などから世界を変える力の育成について一定の成果を確認できる。一方で、成果に ICT の活用がどれだけ関係しているかについては明らかにできていない。また教職員の ICT 活用率は向上したが、生徒の活用率についてさらに向上させていくことができると考える。生徒が目的意識をもち主体的に ICT を活用していく場を増やしていく必要がある。来年度以降は今年度据え置いた教育課程研究を始め、生徒に世界を変える力を育む。その中で、どの場面に、ICT をどう活用することで教育効果があるのかも研究対象していくことでより生徒の力を育む研究となると考える。

## 7. おわりに

「GIGA スクール構想」により、学校現場での児童・生徒用のタブレット端末や、ネットワーク環境の整備が進む。本質を忘れずに、その中でよさを最大限に活用できるよう、そのあり方を生徒と一緒に考えていきたい。

## 8. 参考文献

- ・ 文部科学省(2019)『学習指導要領』
- ・ 奈須正裕 他(2015)『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり』図書文化
- ・ 奈須正裕 他(2015)『知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる コンピテンシー・ベースの授業づくり』ぎょうせい
- ・ 当校研究紀要 第60集(2018)「豊かな対話を求め、確かな学びに向かう生徒を育む授業(2年次)」
- ・ 当校研究紀要 第61集(2019)「豊かな対話を求め、確かな学びに向かう生徒を育む授業(3年次)」
- ・ 田村 学(2018)『深い学び』東洋館出版社
- ・ 新潟大学教育学部附属新潟中学校 (2017)『附属新潟中式「3 つの重点」を生かした確かな学びを促す授業—教科独自の眼鏡を育むことが「主体的・対話的で深い学び」の鍵となる!』東信堂
- ・ 新潟大学教育学部附属新潟中学校研究会(2018)『附属新潟中式「主体的・対話的で深い学び」をデザインする「学びの再構成」』東信堂